

## 地域情報（県別）

### 【鳥取】「地域医療を守る」鳥取と島根のスタンスの違い-谷口晋一・鳥取大学医学部地域医療学講座教授に聞く◆Vol.3

2020年5月22日 (金)配信 m3.com地域版

鳥取大学医学部地域医療学講座は、総合診療医の研修プログラムを用意するとともに、研修医へのきめ細かいフォローを行っている。また、総合診療や家庭医療とは何かを伝えるプロモーションビデオを地元スタッフで制作し、世界レベルの学会で表彰されている。鳥取県と島根県における医学生へのサポートの違いなども含め、当講座の初代教授である谷口晋一氏に詳しく話を聞いた。（2020年2月26日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

#### ――卒後教育についてはどのようなことをしていますか。

鳥取大学は総合診療医の後期研修プログラム（基幹型）を2018年度より実施しています。初年度は受講した研修医はゼロでしたが、2019年度は2人、2020年度も2人受講の予定になっています。総合診療医のプログラムには家庭医療の成分とホスピタリストの成分がミックスされて含まれています。家庭医療の成分については県西部の日野病院など、ホスピタリストの成分については東部の鳥取県立中央病院や鳥取市立病院などと協力してプログラムを運用しています。

たった2人と思われるかも知れませんが、彼らは総合診療のパイオニアになる子たちです。学生時代に真摯に総合診療について向き合い、コアな経験をしてきた子たちです。大変優秀で貴重な人材ですから、計画通りに研修を進められるようしっかり支えていかなければなりません。投げっぱなしにはできないので、指導体制にはかなり気を遣っています。

#### ――総合診療プログラムの実施において一番難しいことは何でしょうか。現状で課題はありますか。

総合診療医には内省する力、つまり自分がどういう価値観・ものの見方をしているのかという自己認識が必須とされます。そのためには、心理社会的な視点も持ちながら、振り返って考える、省察するという行為を、ポートフォリオを書きながら積み重ねていくことが必要です。ですからポートフォリオ作成の指導は、限られた経験者でないときれません。各学生の個性を尊重しながら丁寧なフィードバックを返していかなければなりませんから、指導医の時間もかなりとられます。

また、研修時に実際に診察できた疾患の幅が狭すぎて登録に必要な症例数が不足するなど、条件面／環境面の課題が見えてきています。

現状の課題を克服するために、千葉県亀田ファミリークリニック館山の岡田唯男先生などの総合診療研修プログラムの先進者と協力して内容を定期的に評価してもらうことも考えています。プログラムの良し悪しが、次世代につなげていけるかどうか直結していますから。



谷口晋一氏（鳥取大学医学部地域医療学講座 教授）

**——ほかに地域医療学講座が実施していることで、特筆すべきことはありますか。**

当講座では、家庭医とは何かを理解してもらうために、黒坂地区の診療所を舞台としたプロモーションビデオを作成しました。それがWONCA（世界家庭医機構）で映画賞を受賞したことがあります。かなり凝った作りで、鳥取出身の脚本家・映像クリエイターと組んで、プロの俳優や地域住民が演じてくれています。家庭医とは何か、言葉ではなかなか分かりにくいので、ストーリー仕立ての動画にしました。講義で学生に見せたりしています。

もともと、当講座のロゴやLINEのキャラクターなどをデジタルハリウッドSTUDIO米子でコンペをして作ってもらっていた関係もあって、ビデオの作成スタッフを紹介いただきました。地産地消ですね（笑）。広報という意味では、このような専門学校と組むのはいい取り組みかもしれません。

また、われわれが季節の健康の話題（熱中症や花粉症などに）についてプレゼンした番組を日野町のケーブルテレビで流してもらい、それを当講座のYouTubeの公式チャンネルでも公開しています。さらに日本海新聞や鳥取県社会保険協会が発行している広報誌などに健康に関する記事を寄稿しています。

**——島根大学や島根県との連携、また相違点があれば教えてください。**

島根大学とは1年に1回、中四国地域医療フォーラムで情報交換をしています。また、年に1回程度、鳥取大学と島根大学そして両県の県職員と地域医療支援センターが集まっての交流会を開いています。

両県の違いとして、私個人の感想ですが、島根県は地域枠のキャリア支援やプログラムの開発などに非常に力を入れていますが、地域医療支援センターなどの施設や予算が充実しており、県を挙げて地域枠を守っていこうという熱意があるのが素晴らしいと思います。一方、鳥取県は大学以外にもしっかりした教育サテライト施設が複数設置されているので地域医療教育の場が多く、学生たちは地域医療の現場で密度の濃い教育を受けられることが特徴です。これは学生にとっては大きなメリットだと思っています。このように、島根と鳥取では、医学生にかかわる際のスタンスが少し違うかと思います。

**——最後に、鳥取大学に地域医療学講座がある意義をお聞かせください。**

以前は地域医療に関する教育は皆無でしたが、カリキュラムに入ったことによって概念の理解が進み、学生たちの地域医療に対する拒否感が減ってきています。ですので、彼らが別の分野の専門医になっても、将来はプライマリ・ケアに携わる医療従事者たちに対して理解を示してくれるはずだと期待しています。

現に今、真摯に地域医療に向き合い、総合診療医を目指すパイオニアの学生たちが育ちつつあります。彼らに鳥取県における総合診療や家庭医療を切り開いてほしいと思います。鳥取の地域医療をより良いものにするのに役立つことを期待しています。

地域医療や総合診療は新しい分野ですので、内容がまだよく理解されておらず、違和感を覚える先生方も多いと思います。地域医療学とは、簡単に言ってしまうと、先生方が今やっている仕事の方法をきちんと理解して整理し、言語化して次の世代に伝えていけるものを創ろうというものです。それは決して今の社会や医療の流れに逆行するものではありません。この分野のパイオニアとして頑張っていこうとしている若い人たちを仲間としてぜひ受け入れて、応援してやってください。

**◆谷口 晋一（たにくち・しんいち）氏**

1985年に鳥取大学医学部を卒業し、同大の第一内科（現・病態情報内科学）へ入局、内分泌代謝分野を専攻。1994～1996年に米国国立衛生研究所へ留学し、帰国して2005年から地域フィールド調査「鳥取-江府study」と江尾診療所での生活指導介入を開始する。2010年3月より鳥取大学医学部病態情報内科学准教授となり、同年10月に鳥取大学医学部地域医療学講座教授を併任し、現在に至る。

【取材・撮影・編集＝伝わるメディカル 田中留奈、文＝林文乃】